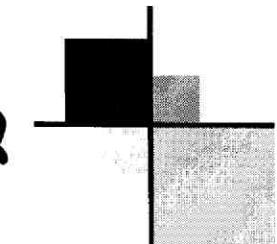




江戸・東京を伝えて、生生発展

## 開館10周年 新たな歩み

～歴史をいまに、今日を未来へ～



## 開館10周年 おめでとうございます

江戸東京博物館友の会 会長 山本市郎

江戸東京博物館開館10周年に当り、友の会を代表してよろこびを申し上げます。今年は江戸開府400年記念としてのお祝いの年でもあり、重ねてめでたい年となりました。

この10年間、江戸東京博物館はたゆまぬ創意工夫と、施設を最大限に活用した大型事業を実施して、毎年多くの来館者を集めただけなく、リピーターの増加など多大な成果を認められました。

たとえば、開館以来46回に達する特別展の企画開催、多岐にわたる分野の講習会・セミナーの実施、多数の出版物の刊行など、数え切れないほどの歴史・文化活動を国内外に発信し、大好評を得られました。

これは館に携わる職員スタッフの方々の努力のたまものであると、深く敬意を表する次第です。

また、開かれた博物館をめざして、2年前の友の会発足から現在に至るまで、多大なご指導・ご援助をいただき、当会の活動も軌道に乗ってまいりました。

おかげさまで会員も800名を超えるまでに育ち、今後もさらに館と密接に連携して、共に活動の場を広げていきたいと考えております。

ここに、館のますますのご発展をお祈り申し上げますと同時に、これからもよろしくご指導・ご支援をお願い申し上げて、開館10周年の祝辞とさせていただきます。



## ハ・イ・ラ・イ・ト

- 3月28日、開館10周年記念日です。
- 年度末になりました。会員更新の方は継続をお願いします。
- 特集「江戸八百八町展」を見て  
1/6 特別観覧会報告、観覧記寄稿
- 友の会セミナー報告
  - ・12/3 「江戸の水運・湊の情景」
  - ・1/21 「光の芸術 江戸切子」
- えど友プラザ 会員投稿のページ
- 〈江戸博クリップ〉学芸員エッセー
- [シリーズ]ミュージアムショップ  
名店めぐり(4)「長命寺の桜もち」
- 《事業部会だより》申込受付中！
  - ・3/5 〈もの〉がたり展 内覧会
  - ・3/21 創作講座「江戸手描友禅」
  - ・3/27 第11回セミナー「明治の女子留学生たちがアメリカで…」
  - ・4/9 第12回セミナー「汽笛一聲  
新橋を～旧新橋停車場開所～」

- 会員優待のお知らせ——
  - ・「江戸東京〈もの〉がたり展」
- この会報は、皆さんと一緒に創るコミュニケーション情報誌です。ご意見、ご要望、投稿などをお気軽にお寄せください。

## 会員継続更新のお知らせ

## ●手続きはお早めに！

友の会は会員の皆さんで支えられています。会員資格は1年間です。まもなく有効期限を迎える方は更新の手続きをお願いします。

該当の皆さんには「継続手続き書類」が郵送されますので、お早めに手続きをお願いいたします。

\* 更新しませんと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなります。ご注意ください。

・特集・

## 大江戸八百八町展を見て

江戸開府400年一千万都市・江戸の賑わい、町人の暮らししがここに！ 話題沸騰、魅力の絵巻「熙代勝覧」

### 手本にしたい江戸の生活

小笠原 淑夫（総務部会）

会場を進むと江戸図屏風による寛永期の町人地があり、表情がそれぞれの場面に対応している400体の縮尺人形で、まず「あっ」となった。

かつて三重県伊勢神宮内宮近くのおかげ横丁・展示館で、20分の1縮尺の伊勢参り行列250体ほどの紙塑人形を見た時は、その精密さに素晴らしいと感じたが、今回はそれを上回る衝撃があった。

目玉の日本橋繁昌絵巻があらわされた。新発見の『熙代勝覧』の世界では、巻物に描かれた精巧な表現に見とれて、つい歩みが遅くなかった。駿河町、十軒店などでは『江戸名所図会』の同地を思い出した。締めくくりは等身大の「節会相撲生人形」の展示であった。

次々と展示品が多いので、できるなら事前に心の準備をしてから、展示資料を見ることが必要であるようだ。まして1回の観覧で全部を細かく見終えるには、工夫がいるのではと考える。貸出用説明レシーバーの利用もその対応の1つであろう。

各研究者の展示成果はそれぞれ目を見張る思いがして『熙代勝覧』の克明な描写に対して優るとも劣らない、丹念な展示で十分に堪能した。

江戸時代の生活などの概要を見つけて、人々の技術の高さ、資源再利用の徹底など、現代の手本にしたい感じのものがあった。

広重「名所江戸百景」復刻コ

ナーでは、現在との写真対比でより身近なものとなつたし、彫りや摺りの実演も一見の価値があるものと思われた。

今回の展示は江戸開府400年事業のオープニングのものであり、次回以降も素質な展示となることを期待している。

### 江戸に触れられた感動

上山 英昭（広報部会）

私は町人の視点でまとめてみました。江戸の土地利用図を見て改めて驚いたものがあります。1747年、武家地は江戸の70%で約50万人、15%が寺社地、そして残りの10%に約50万人の町人がひしめいていたことです。

表通りには商家が建ち並び、路地奥に9尺2間の裏長屋がありました。裏長屋には井戸、塵芥、便所があり、住民共同で利用できました。下水も道路の脇や町裏を流れていきました。また借家人の多くは、租税や町入用を支払う必要はなかったが、町政に加わることも出来ませんでした。

そして、江戸は17世紀後半の元禄期で約800町、延享2年(1745)の寺社門前町の編入で1678町と大きくふくらんでいきましたが、広大な武家屋敷町では夜は街灯もなく、ほとんど真っ暗闇で妖怪が巢喰う場所だったとか。また、「宵越しの錢は持たない」なんて言葉も、実は「持てなかつた」生活だったというのも、新しい発見でした。

この展示の目玉である『熙代勝覧』は「太平の世のすぐれた景観」の意味で、「日本橋繁昌絵巻」のタイトルで展示されていました。

表道路に面した店やさまざまな人々を描いています。楽しいのは、江戸の台所と言われる、日本橋の魚河岸の繁昌ぶりです。道路の両側には魚屋の立ち売りが並び、それを買っている人々がいます。日本橋の上には、青物土物の立ち売りがおり、武士が騎馬で、町人が駕籠で通行しています。ともかくものすごい雑踏です。

駿河町には「すはらや」(須原屋市兵衛)本屋の立て看板があります。当時の最先端の知識人や作家の作品を出版した店です。たとえば蘭学の本、杉田玄白らの『解体新書』を出版し、平賀源内『物類品隠』や『火浣布略説』など出しています。須原屋市兵衛の店先を描いたものは今までありませんでしたからうれしいですね。この須原屋の向かいの家がオランダ商館長が定宿とした長崎屋でした。

この絵巻物には、たくさんの人々や情景が描かれています。その一例を取り上げておきましょう。大八車で石を運んでいる人、手を引かれて歩いている琵琶法師、三井越後屋(今の三越)の店舗とその小僧たち、屋台のすし売り、竹売り、虚無僧、道場掃りの武士、牛車で材木を運んでいる人、屋台の茶店で憩う人々…。そして、火の見台のさまざまな風見鶏や店の前の天水桶などひとつひとつを見ていったら、時間がたってしまいました。

このように江戸の空間の広がり、風俗・文化を堪能できる絵巻物に触れたのは、感動でした。

三井越後屋の経済規模を見て驚きました。1747年(延享4)、大名の代表である102万石の加賀藩が年収17万1667両、それに対して三井越後屋は23万5083両で約6万両も多いということでした。年間の売上げが大名の年

江戸東京博物館友の会 特別観覧会(2003/1/6)

## 江戸開府400年 開館10周年記念 【企画展】大江戸八百八町 展 ～初春の両国が、大いに賑わう～

記念すべき年の幕開けを飾る企画展「大江戸八百八町展」。その特別観覧会が1月6日(月)午後6時から開催されました。

1階ホールで行われたセレモニーで竹内館長(写真)があいさつを兼ねて



企画展の特徴を次のように語りました。

「まず第1に、

輝ける時代のすばらしい情景を描いた絵巻物『熙代勝覧』を、ベルリン東

洋美術館の協力によって展示できること。第2に江戸の住んだ人々の暮らしを具体的に見せていること。そして第3に、学芸員による手づくりの企画展であり、展示品のほとんどが館の所蔵品であることの3つです。この展示を通して江戸を見直し、現在と将来の東京・日本を考えるよですがになれば幸いです」。

さらに、ベルリン東洋美術館のDr.ヴィルバルト・ファイト館長から、『熙代勝覧』の発見・評価にいたる経緯が、祝辞とともに披露されました。

収を上回る三井越後屋のような巨大な経営規模を誇る大店は、江戸時代以外に見いだすことはできません。三井越後屋の「現銀 無掛直(値)」は、薄利多売主義の現代の商法にも通ずるところがあるのは驚きです。

他方、振り売り商人が多種多様に存在したのも江戸以外には見られませんでした。巨大商人と膨大な振り売り商人とが織りなす二重構造は、江戸の商業の特徴でした。この展示会は江戸開府以来の生活、風俗、文化を知る絶好の機会でした。

瞰図・朱引図と目を見張ります。

私が今回の展示で興味を持ったものに「店舗はどの様にして決まつたか」というパネルでした。たびたびの大火があり、その都度復興する江戸。店舗の減価償却が6年というスパン(期間)で考えられ、計算がされていたことを初めて知りました。現在の住宅事情からは考えられないことですし、また住居費も格安であり、案外暮らしやすい時代でもあったのでしょうか。

江戸っ子の自慢のひとつに「水道の水で産湯を使い…」の話がありますが、玉川・神田・亀有・三田の各上水のゆったりした流れに名所江戸百景の趣がありました。

ところで、昨夏ふと買い求めた『日本の歴史 第17巻・成熟する江戸』(講談社刊)の巻頭には、なんと『熙代勝覧』が載っていたのです。生き生きと描かれた小さな人物像を、ルーペを手になんども繰り返し見たかったです。まさか、その絵巻の現物を目の前で

観覧会は、報道関係者や一般招待者などと合同で開かれ、ホールも

展示会場も満員の盛況。参加者は「大江戸の繁昌ぶり」を示す多彩な展示に、大きな感銘を受けていました。

なかでも、日本橋繁昌絵巻と題された『熙代勝覧』、寛永期の町人たちを姿を30分の1スケールにした400体の人形、また第2会場(学習室)の壁に掲げられた歌

川広重「名所江戸百景」復刻版画100点などの前は、じっくりと見入る人が多く、企画展の成功を予感させるものでした。



【取材】広報部会・大松駿一

見られることなど、夢々思いもよらないことで、大変うれしく思いました。

人々の顔は笑みを浮かべた顔が多く、この時代を逞しく生きていたことが分かります。でも、どうしてこのような高所から描くことが出来たのでしょうか。また、このように生き生きとしている源は何でしょうか。疑問が残ります。

描かれた年代は約200年前。私から数えて4、5代前の人たち。系図の上でしか知らない先祖の暮し向きを調べるすべは何もありません。江戸時代の庶民の生活環境は何を取りましても、今とは比較にならないくらいあまり良い環境だったとは思えませんが、何に希望を託して暮らしていたのか、少し知りたくなりました。

石川英輔さんの本に、江戸と現在の東京を行きつ戻りつする小説がありますが、私もタイムスリップして、いいときは江戸で、また帰りたくなったら現代で、とそんな思いを抱かせる「大江戸八百八町展」でした。

### 何に希望を託したのか

山口千恵子(事業部会)

江戸が巨大都市として変貌する様子が絵団屏風に、江戸の景観図・鳥



第9回江戸東京博物館友の会セミナー要録(2002/12/3)

## 江戸の水運・湊の情景 ～下り荷物の世界～

講師 曲田 浩和(日本福祉大学専任講師)

「江戸の流通」は、「江戸の水運」といひ換えられます。江戸開幕以来、江戸の人口は増えつづけ、それを養うためにさまざまな生活必需品や資材などの供給が欠かせませんでした。その荷の運搬は多くを大小さまざまな船に頼っていました。

今回はその水運についてお話をさせていただきますが、テーマは大きく分けて「江戸湊のイメージ」と「廻船と廻船問屋」のふたつです。

### 江戸湊に並ぶ廻船の帆柱

今日では、港はコンクリートできちんと造られ、船は直接埠頭へ接岸できます。しかし、江戸時代の湊は土の岸で遠浅ですから、そうできません。廻船はすべて品川や高輪などの沖、永代橋前などに停泊し、帆柱を並べました。これが江戸湊の象徴的なイメージで、浮世絵などにも多く描かれています。

船と湊の間は小さな瀬取船(茶船・はしけ)で結ばれました。瀬取船は廻船の荷を積み替えて、日本橋川や神田川、深川などの荷揚場に運んだわけです。

廻船の荷を瀬取船へ下ろす仕事は「沖仲仕」がしましたが、船から船への搖れる足場の上での作業は大変な仕事で、体力と熟練が必要でした。力の強い荒くれ男たちの世界といつていいでしょう。

これらの労働集団は瀬取船仲間に掌握され、東湊町組とか鉄砲洲組とかいう5つの組に編成されて、それぞれ独立して活動していました。また、瀬取船から河岸の倉庫へと荷を揚げるのは、荷担ぎ人足の分野でした。

簡単にいえば、湊を仕切っていたのは廻船問屋で、瀬取船、荷担ぎ人足の集団が別組織として働いていたわけです。

### 変化を繰り返した廻船問屋

上方から江戸へ輸入される物資を「下り(くだり)荷物」、逆に江戸から上方へ送り出される品々を「上り(のぼり)荷物」と呼ばされました。それらの運送に当ったのが廻船であり、それに関する種々雑多な業務を管理運営するのが廻船問屋です。

廻船問屋の仕事は非常に多岐にわたります。瀬取船や荷担ぎ人足の差配、荷物の改め(管理)に始まり、売却の斡旋仲介、水主(かこ)たちの宿泊、船上生活品の調達、船の簡単な修理、海難時の処理や代金の送金、為替業務などまで、その業務は年を追って多様化し、増大していました。

元禄期になると、大都市に育った江戸へ物資を集中させが必要になります。このため、大坂の二十四組問屋から江戸の十組問屋への輸送体制が確立され、運賃積みの菱垣廻船が出現します。

同時に海難時の相互扶助も行われるようになりました。当時は、米や酒、油などの重い荷物は船の底に積まれ、木綿や紙、小間物のような軽い荷は上方に積まれました。海難のときには、荷物は上方から海に投棄されましたが、損害については不公平にならないよう荷主全員で代償する制度が生まれました。

しかし享保期に入ると、酒問屋がこれに異議を唱え、また酒は腐りやすい

ことから、独自に「樽廻船」を用い、分離独立していきます。この船は、荷を多く積むことよりも速く航海できる構造を特徴にしています。

また、幕府の方針としては、生活物資はいったん大坂に集め、菱垣廻船によって消費地・江戸へ一括輸送させることにありました。時代とともに諸藩の産業も盛んになり、直接江戸へ運ぶことで利益を増やすとする傾向も生じました。

こうした輸送に当たったのが地域の廻船で、たとえば醸造業が発達した尾張や三河から、酒や酢、味噌などを運んだ尾州廻船とか、材木やみかんを積んだ紀州廻船、塩や砂糖の讃岐廻船などがあります。

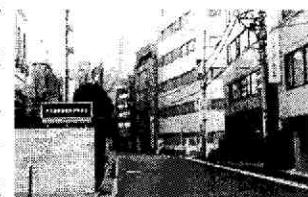
このような地域廻船のなかには、運賃積の船もあれば買積の廻船も出てきます。買積とは船頭が自分の責任で荷物を買い入れて、輸送し、売却する廻船です。米を例にとりますと、米価の安い地方で仕入れて江戸で売る。差額は船頭さんの儲けになります。大きな利益が期待される半面、海難の補償がありませんから危険も大きい。ハイリスク・ハイリターンの商売で、廻船問屋の力量を発揮できるものでした。

### 昔日の湊の情景を探す

最後に、江戸湊の情景はわずかですがいまだ残されています。たとえば、深川の干鰯場(ほしかば)跡や小名木川の川筋とか、新川(中央区)の酒問屋街などに面影を見ることができます。また、浮世絵で賑わった新川の近景などから昔日のイメージを思い浮かべることもできるでしょう。

町並は変わっていても、変わっていない部分を探す目を持つことによって、江戸に近づくことができるのです。

【記録】広報部会・小柳英二郎





第10回江戸東京博物館友の会セミナー要録(2003/1/21)

## 光の芸術 江戸切子

講師 2代目秀石 須田富雄(江東区登録無形文化財)

江戸切子は天保5年(1834)、江戸日本橋の加賀屋久兵衛が金剛砂を用いてガラスに彫刻を施し、切子細工をしたのが始まり、といわれています。

そのころは参勤交代の帰りに、お土産にしたり、黒船来航のペリーはガラス製品を見て感嘆したことです。

明治改革の一環として、イギリスの技師エマヌエル・ホープトマンを招いて明治14年(1881)、日本の特徴を生かした西洋カット加工の技術指導を受けました。

現在では、カットグラス企業は百数十軒ありますが、その70%が集中しているのが江東区です。同区は運河が多く、船でガラスの原料や石炭を運ぶ

ため、川岸にガラス製造工場が出来るようになったためです。

素材には、並ガラス、並色被せガラス、クリスタルガラス、色被せクリスタルガラスなどが使われ、クリスタル生地で、カットも難しい模様を施して仕上げると高級なものになります。

江戸切子は、透明なガラスをカットしたもののが特徴で、薩摩切子は、色の濃いものです。

ホープトマンに教えを受けた一人に大橋徳松がいました(大橋巨泉氏はその子孫)。私の師匠堀口市雄は、大橋徳松の切子の技術を受け継いでいますので、その技法を用いて、老舗の料亭から注文を受け、懐石料理の器を作

りはじめ、粹で暖かみのある製品を世に送り出しました。昭和36年(1961)に初代「秀石」を号しました。

私は大正13年(1924)、墨田区向島生まれで今年79歳です。昭和11年(1936)に弟子入りをし、昭和22年(1947)復員後、再び堀口硝子に入社。工場長として研磨の傍ら後進の指導にあたり、その間、伝統工芸展に出品。昭和60年(1985)に東京都伝統工芸に指定され、この年に2代目「秀石」を継承しました。平成2年(1990)退社し、工房「秀石」を創立。平成3年(1991)江東区無形文化財に登録されました。

### 江戸切子

の魅力は、ガラスの輝きです。これに尽きます。虹色やいろんな色に変わります。角度が鋭利で太く刻んだものほど、光の反射がすごいんです。



るりきせ えんそうとうかごめもん みずさし  
瑠璃被円窓縞籠目紋 水指

高さ130mm×直径240mm

【記録】広報部会・貝森武夫



友の会会員のページ

●最新情報は、ホームページ〈えど友Web〉で！  
友の会の自主運営です。友の会の最新情報、お知らせ、活動予定や会報〈えど友〉のバックナンバー(Web版)もご覧になれます。会員のHPもご紹介します。詳細はHPを参照ください。  
アドレスは、<http://www.edo-tomo.jp/>

## 大相撲の危機（その2）

佐藤 幸彦

前号の表を見ると、最近の決まり手は変化が少なく、引き技が多く、飛びまわって後ろ向きになる勝負(送り出し)が多いこと、などが直ちに判ります。さらに、寄り、押し、突きの決まり手

を前の表では一括しましたが、その中で寄り倒し、押し倒し、突き倒しを数えてみると、1942年は合計57番(40%)、1999年は16番(11%)で、敗者が土俵から出て勝負がつく場合、最近は著しく危険が避けられているように見えます。つまり敗者は早めに試合放棄し、勝者は敗者を庇う傾向が見られます。

この二場所を比較して見て、吊出し、打棄り、内掛け、外掛け、切り返し、各ひねり手、突っ放し、櫂投げ、等々の痛快な決まり手が絶滅又は絶滅に瀕していることがわかります。

最近は上手下手の出し投げが見られません。私見ですが、以前は出し投げと判定されたものが、最近は上手投げや下手投げとされる場合が多いように見受けます。

最近は張り手が多用され、又観衆もそれを喜ぶような傾向があるように見えます。1942年頃の場所で、前田山が、二日続けて唯一発の張り手で羽黒山と双葉山を殆ど脳震盪状態で倒したのを今でも覚えています。決まり手は「はったり」とされました。

これは勝負としては大変な殊勲

## 友の会に期待するもの

すずき しょうせい  
学芸員 鈴木 章生

江戸東京博物館が、3月で開館10周年を迎える。私は準備からなので

14年となる。最初の4年は開館準備に追われ、その後の5年は研究室の設立や収集・展示に追われ、さらに最近5年は友の会やボランティアの設立・運営に“どっぷり”関わった。

「鈴木さんのご専門は何ですか？」などと聞かれると、「江戸の名所や社寺参詣など…」と答えてはいるものの、近頃「論文」を書いていないので少々恥ずかしい。

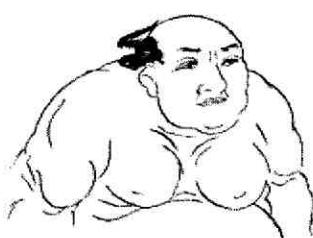
しかし、私にとってこの5年間の友の会やボランティアの方々との出会いは、「学び」の連続だったと言える。

「一般市民が博物館を利用する形」をまさに皆さんとともに考えることができたからだ。

会員個々の企画を実現させる。そのためには会費を事業運営費にする江戸博友の会は、たいへんユニークな友の会です。友の会を盛り上げるのは会員皆さんです。魅力ある企画を博物館で実現、利用されることを大いに期待しています。

ところで、職員も会員になれたんだよね？

◆このコラムは学芸員が執筆しています。



図：谷風 写楽画「大童山土俵入」から(部分)【模写】野坂紘子

だったのですが、ファンの多くは「こんなことが許されるのか」と唖然とし、前田山には厳しい批判が浴びせられました。ついでながら最近は禁手の、堅みつをとることが黙認されているように見えます。

さて最近の大相撲の技が単調になり、怪我の危険を避ける傾向が見られ、しかも怪我が多くなっている原因は明らかに、体重の過大でしょう。

前掲の身長・体重の平均を眺めみると、昭和十七年の「お相撲さん」は、現在の青年の中でやや体重の大きい部類ぐらいの感じです。

その頃、場所がはねて国技館を出て行く群衆の上に、出羽ヶ嶽文ちゃんの首がによっきり出ていて、そばでその下駄を見たら、まな板に鼻緒をすげたようなべらぼうな大きさなのに二度びっくりしました。

とにかく関取は大衆に抜きん出て大きくてこそ、「お相撲さん」です。それを現代に実現すると大相撲の勝負はつまらなくなり、しかも大きい力士は自重で壊れ、大きくなかった力士は大きい力士に壊されてしまうとすれば、やはり大相撲は危機的状況です。では今後、大相撲はどうすれば良いのか、どうすべきなのか。

それは相撲協会の考えるべきことです。そう言ってしまえば総理大臣の答弁のようになってしまって、私見を述べて締めくくることにしましょう。

まず現代の進歩したスポーツ医学で、身長と体重だけでなく、筋力とか反射神経も含む多角的な検査データによる指標を設け、序の口から幕内まで、相撲の成績とともに、各段階に設

定された指標をクリアした力士のみが土俵に上がれるようにし、力士をその目標に向けて指導するトレーナーの体制も完備させることにしてはどうでしょう。

また大相撲を理解する観衆の養成も必要だと思います。がつんとぶつかれば拍手喝采、引き落とせばブーイング、鼻血が出るような張手に歓声。これではがっかりです。観衆も大相撲らしくあるべきです。相撲が他の格闘技と競合すれば、そのアイデンティティーは失なわれます。

大相撲は格闘技としての面白さと共にその古典的な美と品格を徹底的に追求すべきです。美しいお相撲さんが美しい相撲を見てくれる、それが観衆の一人として私の願いです。

## 「友の会に入会を…」呼び掛け！

～1月の展示会場で、総務部会の皆さん～

大盛況の「大江戸八百八町展」会場出口で、総務部会の皆さんのが総出で友の会会員獲得の活動を展開しました。去る1月12、18、19、25日の午後1時から約2時間にわたって、入会案内のパンフを配り、一緒に楽しもうと呼び掛けました。反応は上々で、新会員の増加が期待されます。



入会案内パンフレットを配る総務部会

## 江戸東京博物館ミュージアムショップ 名店めぐり(4)

### 創業享保2年 「長命寺 桜もち」

向島まで足を延ばさないと、手に入りにくい江戸名物「長命寺の桜餅」。ミュージアムショップでもすぐ売り切れてしまいます。その歴史を伺いに(株)やまとさんを墨田区向島に訪ねました。

始まりは享保2年(1717)といいますから、大岡忠相が町奉行に任じられた年です。山本新六という人が隅田川堤の桜の葉を集めて塩漬けにし、餅をくるんで「桜餅」として売り出しました。この新六さん、なかなか先見の明があったようです。ちょうどこの時、幕府が土手に桜の植え足しを始めたからです。

これに花見客がどっと押し寄せました。文政7年(1824)には1年間に約40万個も売れたといわれます。こうして桜餅は江

戸名物の一つになったのです。当時の餅の大きさは今の半分より小さいくらいだったそうです。

店構えも関東大震災までは昔のままでしたが、この時に全壊してしまいました。戦時中は砂糖不足もあって4、5年の間、店を閉めていたそうです。

現在、桜の葉は静岡県松崎町で特別に作られています。山桜の一種で背丈が低く、花と葉が同時に出来ます。

名物として300年近く続いた店はそれほど多くはないでしょう。『江戸名物詩』(作者不詳)には次のような狂歌がのっています。

幟高長命寺 下戸争買三月頃  
此間業平吾妻遊 不吟都鳥吟桜餅



春を味わう 長命寺の桜餅  
墨田区向島5-1-14  
Tel. 03-3622-3266

在原業平がいま隅田堤をぶらついたら、「いざ言問はむ都鳥」とは詠まず、「いざ味はむ桜餅」と詠んだであろう、という意味だとか。

社長の山本進さんは、近くの人たちに楽しんでもらえばいいと考えて、デパートなどへの出店をなさっていません。3枚の桜葉に包まれた桜餅は江戸の歴史をしっかりと含んでこれからも江戸名物として人々を楽しませてくれることでしょう。

【取材】広報部会・岡橋園子

\*店名は「桜もち」、商品名は「桜餅」と表記

## 事業部会だより

### 特別内覧会

【企画展】江戸開府400年 開館10周年記念

### 「江戸東京<もの>がたり 展」

- ・開催日:3月5日(水) 18:00~20:00 (受付開始17:30)
- ・申込締切:3月3日(月)必着
- ・会場:江戸博1階ホール/展示室
- ・参加費:会員限定。記念事業として「無料」

申込受付中

無料

万点に及びます。それの中から、「楽しむ」「着る」「伝える」「食べる」「働く」「住もう」「運ぶ」のテーマに沿ってさまざまな(もの)約1,000点を展示し、江戸・東京の暮らしの変化を実感していただきます。また重要文化財「オランダ風説書」も紹介します。

◆マーク&キャラクター受賞作品発表・授賞式開催。図録は価格未定。

### 創作講座

#### 日本の心と美 「江戸手描友禅」

講師:田中 光江さん(佐藤平八工房)

- ・開催日:3月21日(金) [午前]10:30~13:00 [午後]14:00~16:30
- ・申込締切:3月14日(金)必着
- ・会場:江戸博1階学習室
- ・定員:各30名(一般も可)
- ・参加費:会員5,000円、一般5,500円(当日払い)

製作物はつぎの8種類の花柄から選んで描きます。ツバキ、ナデシコ、

テッセン、カタクリ、ミズバショウ、ショウブ、アジサイ、サクラ。

講師略歴:たなか・みつえ

1964年世田谷に生まれ。85年に日本画家で友禅作家の佐藤平八師に内弟子入り。87年以降毎年足立区梅島小学校・皿沼小学校の友禅講師を務める。

2000年以降は宇都宮東武、池袋東武で作品展に参加。



## 友の会セミナー

### 第11回 「明治の女子留学生たちが、アメリカから学んだこと」

講師：久野 明子さん（社団法人 日米協会専務理事）

・開催日：3月27日（木）18:00～19:30 ・申込締切：3月15日（土）必着

・会場：江戸東京博物館・1階会議室

・定員：100名（会員本人に限る） ・参加費：200円（当日払い）

明治4年(1871)、新政府派遣の女子留学生たちは「勉学に励み、日本女

性の範となるべし」という国家的使命を負って未知の国アメリカへ旅立ちま

した。そこで彼女たちは何を見て、何を学んだのでしょうか。

講師略歴：くの・あきこ

昭和15年(1940)東京生まれ。慶應義塾大学文学部卒業。在学中に慶應・スタンフォード大学夏季交換留学生として渡米。引き続きミシガン州オープンカレッジとミシガン大学に学ぶ。著書『鹿鳴館の貴婦人・大山捨松』『昭和天皇最後の御学友』など。

## 友の会セミナー

### 第12回 「汽笛一声新橋を ～旧新橋停車場いよいよオープン～」

講師：原田 勝正さん（和光大学名誉教授）

・開催日：4月9日（水）18:00～19:30 ・申込締切：3月28日（金）必着

・会場：江戸東京博物館・1階会議室

・定員：100名（会員本人に限る） ・参加費：200円（当日払い）

明治5年(1872)、日本近代化の象徴といえる鉄道事業が旧新橋停車場

(汐留)を起点としてスタートしました。その役割と発展過程を営業開始から

廃止に至るまで、エピソードを交えて語っていただきます。

セミナーを受講して見学すると、展示がさらに興味深くなるでしょう。

講師略歴：はらだ・かつまさ

鉄道史学会、交通権学会などの会長を歴任し、鉄道史の第一人者。4月上旬オープン予定の「鉄道歴史展示室」(汐留・旧新橋停車場駅舎内)の展示企画を指導。

## 講座受講 申込方法

お申込は  
通常ハガキで

●通常ハガキでお申込ください。返信連絡はいたしません。申込済の方は当日、受付で登録ください。  
事前申し込みがないと受講できません。必ず申し込みをしてからご参加ください。

#### ▼申込方法：

- |   |   |
|---|---|
| 通常ハガキに《開催日「テーマ名」応募》と、<br>①会員番号②氏名③〒住所④電話番号を明記。会報、友の会のご感想・ご要望もどうぞ。 | 各講座ごと、会員限定（一部一般可）、1人1通。                       |
| ▼申込先：130-0015東京都墨田区横網1-4-1<br>江戸東京博物館友の会事務局あて                     | ▼申込先：130-0015東京都墨田区横網1-4-1<br>江戸東京博物館友の会事務局あて |
|   | ▼締め切り：各講座案内を参照（必着）                            |

## 会員優待のお知らせ

3月28日に開館10周年を迎えます。これを記念して各種のイベントが行われます。詳しくは館の案内パンフレット、ホームページをご覧いただき、ぜひ、ご来館ください。

### 【企画展】江戸開府400年 開館10周年記念 江戸東京〈もの〉がたり

～江戸東京博物館特別収蔵品展～

会期 3月6日(木)～3月30(日)

月曜休館

◆3月28日(金)は開館10周年記念「入館無料デー」、常設展、企画展が無料となります。

・図録は価格未定、会員10%割引、会員証提示

会員：一般250円、65歳以上120円、大専門生200円  
同行者：一般400円、65歳以上200円、大専門生320円

## 会計事務ボランティア急募！

会計事務処理のお手伝いで、伝票起票・ファイリングなどの仕事です。月1回、半日ぐらい、場所は江戸博事務棟内。ハガキに、〒住所、氏名、電話、会員番号、を明記して、事務局までご応募ください。



次号は5月1日発行予定です。  
<http://www.edo-tomo.jp/>

江戸東京博物館友の会  
会報〈えど友〉第12号

発行日 平成15年(2003)3月1日

発行 江戸東京博物館友の会事務局◎

130-0015 東京都墨田区横網1-4-1

Tel. 03-3626-9910

編集・制作 友の会広報部会

発行・編集人／佐山彪(事務局長) 編集主幹／大松智一  
編集／岡橋園子、菅沼和男、佐藤幸彦、貝森武夫、  
上山英昭、小柳英二郎 レイアウト・版下作製／巻渕彰